

「令和」の香り

藤袴は、奈良時代に中国から日本にきた外来植物であるというのが通説です。秋の七草の一つであるにもかかわらず、日本固有種でないのは、この藤袴だけです。しかし、藤袴は、文献上では、「日本書紀」の允恭天皇の皇后についての記述で、「蘭（あららぎ）」と書かれ、また万葉集では、山上憶良により「秋の七草」として詠まれています。古くからその芳香が日本人に親しまれてきた野草です。

「令和」の出典になった万葉集巻5の梅花の歌32首の序文には、「梅」の花と「蘭」の香りが、対比して出てきます。

于時初春令月氣淑風和

梅披鏡前之粉蘭薰珮後之香

時、初春の令月にして、氣淑（よ）く風和ぎ、梅は鏡前の粉（ふん）を披（ひ）らく、蘭（らん）は珮後（はいご）の香（こう）を薰（くゆ）らす。

折しも、新春の佳き月で、気は清く澄みわたり風はやわらかにそよいでいる。梅は美しい人が鏡の前で白粉をつけているかのように咲いているし、蘭は貴人の飾り袋の香のように匂っている。

(現代語訳：伊藤博氏による)

この「蘭」は、藤袴です。古代の中国では「蘭」は藤袴でした。宗時代以降は、ラン科植物も指すようになり、藤袴は蘭草、ラン科植物は蘭花と区別するようになりました。我が国では、平安時代の中期から鎌倉時代の中期にあたるため、万葉集巻5の梅花の歌32首の序文の「蘭」は、藤袴を指していると考えられます。乾燥した藤袴の葉や茎には、クマリンの香りがします。桜餅の葉の香りと似ています。この香りは、万葉の時代から人々に親しまれてきましたが、最近の環境条件では、その数が減少して、今では絶滅危惧種となっていて、その香りに触れる機会がなく、人々からは忘れ去られております。

しかし、この奥ゆかしい藤袴の香りは、「令和」の時代にふさわしい香り、いわば「令和」の香りとも言える香りではないかと考えています。

今年は、野川に自生する藤袴の葉を乾燥し、粉にして、100個余り藤袴の白い袋をつくり、親戚や友人に送ってみました。そのほとんどはいい評価が帰ってきました。

来年はもっと多くの藤袴の白い袋をつくり、更に多くの方々に、この「令和」の香りを直に触れ、楽しんでいただければと思っております。

令和元年11月 安達榮一



すり鉢で藤袴の葉を粗く粉に



ティーパックに藤袴の葉の粉を収納



藤袴の匂い袋